
魔人種

マーチ13

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔人種

【Nコード】

N78890

【作者名】

マーチ13

【あらすじ】

これは、世界に忽然と現れた、魔人と呼ばれた新たな種族、その始まりの物語である。

序章 1

最悪の日

凄まじい光と共に襲ってきた全身を駆け巡る衝撃と痛み。

なんだ！！？ 何が起きた！！？

一瞬浮かんだ疑問は、すぐに痛みによってかき消された。

全身に襲い掛かる痛みは、到底彼が耐えられる様なものではなかった。

「！！！！！！」

痛みによる絶叫を上げたが、声が、いや音が出る事はなかった。

しかし、継続的に続く凄まじい痛みが、目を覆い視界を潰す凄まじい光が思考を麻痺させ、平静であれば抱いたであろう、音が聞こえないという疑問を、浮かばせなかった。

薄暗く、だがそれなりに広い部屋の中、その中央にある壇上。

そこに奇妙な物が幾つも置かれ、その中心の床には複雑な紋様と文字が、円を描きながらびっしりと描かれている。

ある種の祭壇のようにも見える場所だ。

円の周りに置かれた物は、どれも僅かに光りを放っている。

しばらくすると、その光りに呼応するように、床の文字や紋様も次々と光りだした。

光りは次第に強くなり、突如空中に文字達が飛び出し壇上を弧を描きながら乱舞する。

やがて光りは螺旋状に動きながら一箇所に集まり、さらに激しく光り出す。

激しい光は、突然凄まじい音と衝撃を、放射状に生み出した。

もしこの場に人が居たならば、音で鼓膜が破れ、衝撃で体を吹き飛ばされ、

壁に叩き付けられていたであろう。

音と衝撃が生まれた瞬間、光りの中に黒い点が現れ、みるみる大きくなり黒い球体となる。

黒い球体は、自身を覆っていた光をすべて飲み込むと、空中に静止したまま、ベチャリと粘度の高そうな黒い物を吐き出した。

やがて球体は、溶ける様に消えて行き、吐き出された物も黒い粘土状の物は消えたが、その中の者は残された。

彼はようやく痛みが終った事に一旦安堵していた。

全身には痛みがまだ残っていたが、ともかく、あのとても耐えられない痛みは治まった。

あまりに凄まじい痛みは気絶することさえ許さず、しかも継続的に襲ってきたために、それがどれだけの時間だったのかまるで分からなかった。

一瞬の様であり、永遠の様でもあった。

だがそれは終わった。彼は安堵に浸り意識を手放そうとしていた……だが。

声が聞こえてきた。彼は最初それが声だとは気づけなかった。なぜなら、その声の言葉が彼にとってまったく聞き覚えのない言葉だったからだ。

『なんだ……？何語だ……？』

彼は途切れそうになる意識で思考する。

その思考が彼の意識を僅かに呼び戻し、次の思考に進めた。

『……っていうか、……オレどうなったんだ……？』

今更ながら自分の身に起きたあまりに不可解な出来事に困惑する。

『たしか……コンビニに行って……雑誌とジュースを買って……』

そのまま帰って……来たんだっけ……？』

彼の体は、かろうじて人らしき形を残していたが、けして人間とは言えない姿形に変わっていた。

それは、吐き気すら催すほど醜悪で、哀れを誘うほど弱々しい、怪物としかいえない姿だった。

四肢らしき物は付いていたが、明らかに、ちぐはぐかつばらばらに付いており、到底四肢の役目を果たせるとは思えない。

これでは、地面を芋虫のように、はいずるよりほかない。

声帯も変化してしまったのか喋ることもできない。

何故こんな事になってしまったのか、今はただ、混乱することしかできなかった。

序章 2

召喚失敗

部屋の隅にある頑丈そうな鉄製の扉が開く。

「……………ちくしょう!!!」

男が悪態をつきながら部屋に入ってきた。

「…………魔力は……………だめだ、反応がない……………本物のクズだ……………なんてこった。」

次に入ってきた男が、手に持っている道具で魔力の有無を調べながら落胆する。

「…………こんな結果……………室長にどう報告すりゃいいんだ?」

三番目に入ってきた男が、肩を落としながら言った。

「魔力炉まで使ってこれじゃあ……………」

「それだけじゃない……………空間結晶を消耗品として使ったんだぞ。」

「恐ろしく金の掛かった召喚実験だったのに……………なんだってこんな事に。」

三人が思い思いに言いながら召喚された者に近づき、部屋の中央の祭壇まで来る。

「おい!それ以上近づくなよ、魔方陣に張ってある結界を越えたら攻撃されるかもしれないぞ。」

「大丈夫だろ、明らかに弱っているし、それに、とてもまともに動けるような身体つきじゃないぞ、と言うか、こいつはいつたい何なんだ?魔界の生物か?」

「なにバカなことを言ってるんだ、魔力がないんだから魔界の物のわけないだろ。」

「じゃあなんなんだ?召喚ゲートは黒く染まった、あれは魔界と繋がった証拠だろ?」

「俺が知るか、こつちが聞きたいくらいだ」

「まったく、なんだってこんなことになったんだ……………」

膨大な魔力と超高額の貴重品を使って、上位悪魔を召喚するはずだ

ったのに、

出てきたのは、魔界から来たかどうか怪しい謎の生物・・・」

「何の実験にも使えそうにない、魔力ゼロのクズときたもんだ。」

「それよりどうするんだ、なんだかすぐにでも死にそうだぞ。」

「とりあえず室長に見せるまで、死なれるとマズイかもしれん。

処置室に運んで生体維持装置に繋いでおこう。」

「そうだな・・・そうするか。」

そう決まると男たちは魔法で生き物を眠らせて運び出した。

この五日間、召喚された生物を調べてみたが、特質すべき点はなにもなかった。

それどころか、この生物は生命として欠陥だらけだった。

手足があるのに使えない、内臓器官がまるで、適当に詰め込んだかのように、バラバラに納まっている。

こんな生物はありえない、もしありえるとしたら・・・

「・・・ふむ。」

研究員達を書いた、召喚生物の報告書を読んでいた初老の男は、一つの結論を出していた。

召喚による再構成の失敗。

何故悪魔召喚が失敗したのかは、今もって分からないが、何らかの失敗が起こったのは間違いない。

この失敗によって、別の存在が召喚されてしまったのだろう。

基本的に肉体と言う物を持たない、魂だけの存在といえる悪魔を召喚する為の召喚装置だ、肉体を持った存在を、召喚できる様には出来ていない。

そのため、無理に召喚された結果、肉体がメチャクチャな状態で再構成してしまったのだ。

召喚されたのは、おそらく人間、もしくは亜人だろう。

魔力が、まったく感知できなかったのには、少し驚いた。

人間や亜人であれば保有魔力がどんなにわずかでも反応があるものだ。

研究員が使った計測器、これに反応しない生物は、小型の動植物ぐらいだ。

反応がないことで、正体の候補から人間を除外するという、先入観を起して、人間とは気づかず、未知の動物ではないかと、報告書に書いてしまったのである。

魔力は魂から発せられる物だ。魂のない肉体に魔力は存在しない。

ゆえに、これが人間であるならば、この人間の魂はすでに存在しないことになる。

なぜ存在しないかと言えば、やはり召喚の影響だろう。

召喚の際離れたか、もしくは消滅したのであるう。

むしろ、この召喚で呼び出されるとしたら、肉体のみよりも魂のみのほうが、可能性としてはありえそうだ。

だが呼び出されたのは肉体で、魂にさらに多くの負荷がかかって、分離もしくは消滅したと推察できる。

魂が無いのに肉体が生きている理由は幾つか思い当たる。

即死しない程度に魂が僅かに残っていたか、離れた魂が完全に抜け切っていないかなどだ。

もつとも計測器に反応しないほどでは、生命維持装置に繋いでいてもすぐに死ぬだろう。

今すぐに死んでもおかしくない。

「どうしたものか・・・」

報告書を机の上に投げ出し、この研究室の室長である男は、今後のことについて考えていた。

悪魔召喚に使った経費は大きい、しかも失敗となれば、かかった金

をドブに捨てたに等しい。

この失敗は自分の経歴の、大きな汚点となってしまうだろう。

「どうにかならんかなあ・・・」

弱音を吐いてもどうにもならない。

どこかから他の室長達の笑い声が聞こえてくるような気さえする。

召喚実験は、実験と銘打ったものの、召喚そのものが目的ではない。あくまで、召喚によって得られる、新たな素材となる上位悪魔が目的だった。

この研究所にある、素材用の悪魔の中で、上位悪魔は1体しかない。

ゆえに希少すぎて、実験の使用許可など、下りることは無い。

だから自分で召喚しようとした。

悪魔の召喚はそれほど難しくはない、技術的には。

下位ならば個人で召喚可能だ。だが中位や、まして上位ともなれば、とたんに難度が上がる。

理由は主に魔力と金だ。

召喚に必要な膨大な魔力はとても人間が出せるようなものではない。下位ですら、天才と呼ばれる者で、なんとかギリギリといった具合なのだ。

そんな魔力を生み出せるのは、国家のみが所有する魔力炉しかない。そして高価な空間結晶とよばれる希少石が必要になる。

これは空間を制御する術に必ず必要になる石で、瞬間移動の魔法などにも使われ、同じ世界の中を、移動したり繋げたりする分には、まったく消耗することはないが、別の世界に繋げようとすると、一気になくなってしまう物なのだ。

またこちらも下位より上位のほうが必要消費量ははげしい。

今回の召喚を行うにあたって、とった方法は、普段は国の公共設備などの、ライフラインの動力としてのみ使われる魔力を、コネとワ

イ口を使つて、公共設備の整備期間中に、ストップしてあまつた魔力を、こちらに流してもらえようにしてもらい、研究費の大部分を使つて、空間結晶を買い揃えた。

公共設備の整備期間中と言う、限られた時間の中でしか魔力炉の魔力が使えないので、召喚の日時の変更はできず、不運にも室長会議と言う、バカバカしくも欠席できない物とかち合つてしまい、召喚を部下の研究員に任せるしかなかった。

自分自身が立ち会えないと分かつていたため、下準備は徹底的に行つたつもりだったのに、召喚は失敗してしまった。

部屋の中で男は、やるせない倦怠感に包まれていたが、しだいに心の中から、怒りにも似た衝動生まれ、このやり場の無い感情をぶつける、捌け口を欲していた時、机の上の報告書が目に入った。

序章 3

悪魔の提案

『なぜ………』

ここに来てからの、彼の頭の中は、この言葉ばかりが響いていた。なぜ自分はここに居るのだろう。なぜこんなにも身体が痛いのだろう。なぜ声が出ないのだろう。

なぜこんな身体になってしまったのだろう。なぜこんなに酷い事をされるのだろう。

幾つ物なぜが頭の中で鳴り響く。

最初は助けしてくれるのかと思った。

自分の身体がおぞましく変化し、到底人間とは言えない姿になっていたのに気づいたとき、混乱し声を、いや音を上げる事しかできなかった。

喉は奇怪な音しか出せず、身体は満足に動かせず、全身を痛みと不快感が絶えず覆っている。

混乱と恐怖の極致に居た時近づいてきた、聞いたことの無い言葉を使う男達は、彼を見て何かを話し合い眠らせると、祭壇の様な物がある部屋から連れ出した。

次に目を覚ましたとき、彼は自分の身体を覆っていた、痛みと不快感が、幾分和らいでいることに気が付いた。

身体の各所に、点滴の様なチューブが繋がり、台の上に寝かされていたので、てっきり助けしてくれるのだと思ったが、すぐに違う思い知った。

男達は彼の身体を解剖し始めたからだ。時には眠ったまま、時には起きたまま解剖された。

不思議なことに、解剖のさいにできた傷は、すぐに癒された。

この数日、身体のおちこちを、切り開かれては癒されるということ、繰り返された。

なんとか意思の疎通を図ろうとしたが、言葉が分からずそもそも声が出せない。

身体は台に固定されているうえ、薬でも使われているのか、身体を動かす力が全くでない。

『このまま、訳も分からず殺されるのか……』

実験動物の末路など大抵が死だ。

意識が絶望に沈み、なにも考えたくなっていたとき、……

・それは聞こえた。

『……—』

一切の思考を放棄しようとしていた頭の中で、何かが聞こえた。いや、浮かんできたと言ったほうが良い。

突然起こったそれに混乱していると、次第にハッキリした物になってきた。

『……オイ……聞コエルカ……オイ』

それが言葉だと気づいて更に混乱する。

『……なっ!!……なんだっ!!?』

そこは頭の中、つまりは自分の心の中なのに、明らかな他者としての意思を乗せて、言葉が浮かんできた。

『……ヨウヤク繋がッタナ。』

『なだよこれ!!どうなってるんだ!!?とうとうオレは狂っちゃまったのか??』

『イイカラ落着ケ、……落着イテ、冷静ニナツテ話ヲ聞ケ』

『冷静になれって言われてもなれるかよ!!?っていったい誰と話してるんだ!??』

そもそも話してることになるのか!!?』

あらゆる疑問が一気にあふれてくる。

『コレハ念話ダ、心ト心ヲ繋ゲタノダ。』

ソレカラ、コチラニ声ヲ送り届ケルヨウニ、意識シテクレナイカ。

意識シテクレナイト、ダイタイノ感情グライシカ、コチラニ伝ワツテコナイノダ。』

とりあえずすべての疑問を一時棚上げし、浮かんできた言葉どうりに、心を落ち着けて、意識を浮かんできた言葉の持ち主に、送り届けるイメージをうかべる。

『・・・こっ・・・こうか？・・・聞こえるか？』

『ソウダ、ソウヤツテ意識ヲ言葉ニシテ、コチラニ送ツテクレ。』

彼は、意思の疎通ができたとわかると、ふたたび興奮した様に、さっそく様々な質問をしようとした。

『なあ！！あんたいったい何なんだ！？』

どうして頭の中に・・・声？を送るなんてできるんだ？それから・・・

・
』

『ダカラ、マズ八落ち着ケト言ツタダロ。マズ最初ニ、オレノ話ヲ聞ケ！！』

幾分強い調子で送られてくる声に押されて、口をつむぐ。

『イイカ？マズオレノコトダガ、・・・オレハ悪魔ダ。』

こうして始まった悪魔との会話で、彼はようやく自分の身に何が起きたのか知ることができた。

ここが自分が居た所とはまったく違う場所であり、異国どころか、異世界なのだとだと。

この世界には魔法があり、魔法によって召喚されたのだと。

召喚は、悪魔を呼び出すはずであり、失敗して偶然彼が呼び出され、しかもその影響でこんな身体になってしまったのだと。

あまりに理不尽な話だったため、彼は途中から耳を塞ぎなくなったほどだ。

もつとも、悪魔の声は心から聞こえてくるため、遮断する方法は彼には無いのだが。

悪魔の話は淡々と続き、ここが魔術師達の研究所であること、研究

の内容が、生物と生物を融合して生み出す、キメラの製造であること、

悪魔を呼び出し、キメラの材料とするつもりだったこと。

この悪魔は、彼より10日ほど前に召喚されて、近くの部屋に閉じ込められているが、封印が完璧ではないため、ある程度周りの様子を見ることができ、近くであれば念話ができるのだと。

彼は珍しい生物だと見なされ、解剖されたのだと。

『人間だと、気づいてさえ、もらえていなかったのか……』

『下っ端ハ気ツイテイナカタガ、奴ラノ上司ハ気ツイテルミタイダゾ。』

『本当か!!?』

『気ツイタカラト言ツテ助ケテナドモラエンゾ』

『なっ!!なんでだ!!?』

『ココノ研究ハスベテ違法デナ、ソモソモ悪魔召喚ナド、一族スベテニマデ累ガ及ブホドノ重罪ダ。』

ソナナ罪ヲ平気ナ顔シテ犯シテルヤツラガ、他人ヲ助ケルト思ウ力?

ダイタイココデハ人体実験ナンテ日常茶飯事ダ。』

悪魔は、ここが表向きは健全な研究所をよそおった、違法な秘密研究所だと言った。

ここでは毎日の様に、健康な人間がキメラの材料となつて、怪物へと変えられているのだと。

『……オレは、これからどうなるんだ……』

まったく未来の無い状況を説明されて、彼の心はさらに沈んだ。

『才前ノ身体ハ、骨格モ内臓モグチャグチャナ状態ダカラナ。遠力ラズ才前ハ死ヌダロウナ。』

死という言葉を、他者からはっきりと告げられ、今更ながら激しい

恐怖が襲ってきた。

『……いやだ……。死にたくない……。死にたくない
よう……。』

恥も外聞も関係なく嗚咽し涙する。

『クツクツクツ……。情ケネエナア、コノ程度デ泣クナ
ンテ、ナンテ心ノ弱工奴ダ。』

『うるさい！！だいたいお前だっておんなじ様なもんだろぅが！！
！！』

『マアナ、ダガ情ケナク泣イタリナンカシナイゼ。マダ諦メチャイ
ナイカラナ。』

悪魔の諦めないと言う言葉と、さっきからの雰囲気から、もしか
しと思う。

『まさか！！助かる方法があるのか！！！？』

『アア……。アルゼ……。マツタク、ヨウヤク本題二入レ
ソウダ。』

絶望しか見えない暗闇の中で、悪魔がもたらした一筋の光り、彼は
その光りに縋り付く様に、話の先を促した。

『イイカ？ソモソモ才前二接触シタノハ、才前二ナラコノ最悪ノ状
況ヲ、何トカデキルカモシレナイカラダ。』

どういう事だろうか。自分は身動きすらとれず、ましてや瀕死の状
態なのに。

『理由ヲ今カラ説明シテヤルカラ、ヨク聞イテロヨ、マズ才前ノ事
二付イテダ。』

才前ハ異常ダ。異常トイッテモ身体ガ変ワッタコトジャナイ。
才前自身ノ存在ソノモノガ異常ナンド。』

いきなり自分の存在が異常だなどと言われ、彼は困惑した。

『コノ世界ノ生物ハ魂ヲ持ッテイル、ソレガドンナニ小サナ生物デ
モダ。』

ダガ才前二ハソノ魂ガナイ。

コレハ、モトカラ持ッテイタノヲ、無クシタト力消滅シタトカジヤナイ。

才前二ハ最初カラ無インダ。

オレハ悪魔ダカラ、魂ノ氣配ニツイテハ、人間ナドヨリズツト敏感ダ。ダカラワカルンダ。

才前ノ身体カラハ、残り香スラ感じラレナイ。

魂ノ残り香ハ、死体ドコロカ、触レタリ通ツタリシタ場所ニサエ、暫ラクハ残ル物ナノニ、才前カラハ、ココニ居ル人間ノ物シカ感じナイ。

コノ世界ノ生キ物ハ、魂ヲ失ツタラ間違イナク死ヌ。

ダガ才前ハ生キテイル。考エテサエイル。

魂トハ、肉体ヲ動カス食料以外ノ動力源デアリ、様々ナ経験ヤ記憶ヲ蓄積スル場所デモアル。

ダガ才前ハ、肉体ヲ動カスノ二魂ノ力ヲ使ワズ、記憶ヤ経験モ頭ノ中ノ脳ニ保存シテイル。

コノ世界ノ生物ニトツテ、脳ハ魂ト情報ヲヤリトリスルダケノ場所ナノニ、魂ト同ジコトガ出来ルナンテ、才前ノ脳ハ恐ロシク優秀ダナ。

肉体ニシテモ、魂ガナクテモ動ケルトシタラ、コノ世界ノ生物トハ、比べ物ニナラナイクライ、食料ノ消費効率ガ良イノダロウ。

コレホドマデ違ウノハ、ヤハリ世界ガ違ウカラナノダロウナ。

オソラク、才前ノ世界ノ生キ物ハ、スベテ魂ヲ持ッテイナイノダロウナ。

オカゲデ、念話ヲ出来ル様ニスルノニ、苦勞シタガ。[㍑]

念話は、魂と脳の繋がりに割り込む物だが、彼には魂がなく、魂と脳の繋がりも無いので、

脳に直接繋いだのだが、このやり方は初めてだったので、時間が掛かっていたのだ。

『次ハキメラニツイテダ。サツキモ言ッタヨウニ、キメラハ生物同士ヲ魔法デ融合シテ作ル。』

ソノ際、融合スルノハ肉体ノミナラズ、魂モ融合シテシマウ。

ジツハ魂ニトツテ、融合ハ致命的ナモノデ、融合シタ魂ハ例外ナク狂ッテシマウ。

狂ッタ魂ハ、心ガ崩レテシマイ、キメラハ身体ノ動力シ方ドコロカ、心臓ノ動力シ方サエ忘レテ死ヌ。

ダカラ、キメラヲ作ルトキハ融合ノ際、傀儡ノ魔法モ一緒ニ仕込ム。キメラニナル前ノ魂ノ情報ハ、壊レテ使エナクナッテシマウタメ、身体ノ動力シ方ドコロカ、

呼吸ノシカタヤ、心臓ノ動力シカタナドマデ、魔法ニ仕込マネバナラズ、魔法ニコメラレル命令ノ容量ノ関係デ、結果単純ナ命令ヲ聞く様ニシカデキナイ。

サテ、ココカラガ本題ダ。

魂ノナイオ前ガキメラニナッタラドウナルト思ウ？」

彼は、ハツとなつて悪魔の声に聞き入る。

『狂ウノハ魂ガ融合スルカラデ、魂ノナイオ前ハ狂ッタリスルノカ？マシテヤ、融合スルノガ魂ノミノ悪魔ダッタリシタラ、ドウナルノカナ？』

もしかしたら狂わずにすむかもしれない。

肉体を持ったものとの融合では、融合の結果脳が変化してしまうかもしれないが、悪魔との融合なら、これ以上の肉体の変化は、起きない可能性が高い。

『でも、傀儡の魔法をかけられるんだろ？』

『傀儡ノ魔法ハ魂ニカケラレル。ナゼナラ魂ガ肉体ニ命令ヲ下シテイルカラダ。』

ツマリ魔法ハ、融合シタ魂ノ方ニカケラレ、オ前トノ繋ガリノ状態ニヨツテハ、命令ヲ無視デキルカモシレナイ。』

悪魔の提示した方法は、ほとんど運試しだが、この状況では唯一の方法だった。

問題は自分をキメラにするのかどうかだが、悪魔は研究者達が、自分を使ってキメラを作ろうとしていると、教えてくれた。

後は、少しでも助かる可能性を上げるための方法を、話し合い考えた。

しばらくして、悪魔が訃報を持ってきた。

融合には悪魔自身とキメラが使われる様だ。

これは、悪魔にとっては死刑宣告で、彼にとっては可能性の低下だった。

キメラは、肉体と、狂って心が壊れていても、魂を持っている。

これにより、悪魔は狂って心が壊れることが確定し、彼も脳が変化するリスクを負った。

だが悪魔は、彼に対して協力を続け、的確なアドバイスを出し続けてくれた。

悪魔は彼に、自分の復讐をしてくれと頼んだ。

『オレハモウスグ死ヌ。ダカラオ前・・イヤアナタ様ニタノム。オレヲ殺ス奴ラニ、オレ以上ノ苦シミヲ与エテ殺シテクレ。』

呼び方が変わっても、悪魔が卑屈なやつとは思わなかった。

『そういえば、お互い名乗ってなかったな。オレは』

『マツタ！言ワナクテイイ。名前ヲ知ツタラ融合ガ深マツテ悪影響ガデルカモシレナイ。』

ダカラ、オ互イ知ラナイハウガイイ。』

悪魔はそう言って名乗り合うのを拒んだ。

序章 4

カメラ生成

部屋の中では、あわただしく人が動いている。

魔方阵の周囲に設置された、融合の為の魔法機械を弄っている者、ノートに機械から表示される情報を、書き込んでいる者など様々だ。それらの人間に指示を飛ばす男は、この研究室の室長だ。

この融合実験は、半ば憂さ晴らしの様な感じで始めた実験だが、案外面白い結果が出るかも知れないと思っていた。

この素材は、魔力を感じられないほど魂が希薄なのに、何故か生きている。

普通は、魔力を感じられなくなるほど小さくなると死ぬ。

にもかかわらず、生きていけるとなると、絶妙なバランスの上で成り立っているのだろう。

こんな、ある意味奇妙な実験素材は初めてだ。

男は気づいていなかった。

自分が部下達と同じく、生きていれば魂があるという先入観によって、この素材の魂は、わからないほど小さいと思い込み、本当はまったく無いのだということに。

そして、気づかぬまま、融合実験は始まった。

部屋に入った時から、悪魔との念話はやめていた。

彼の意味が脳のみにあっても、融合により魂を得て、ソコから来る情報と混ざり合って、崩壊する可能性は十分にあると見ている。

ゆえに、その可能性を上げないように、他者の意思は極力排除する様に決めた。

また融合する時、自分の元の姿を思い描き、それ以外一切考えない

ようにして、脳や身体が致命的な変化を起さない様にする。

悪魔は、キメラを思いながらも、姿は一切思い描かない様にして、自分とキメラの結びつきを強めて、彼との結びつきを弱くする。

これがどこまで有効なのかわからないが、これ以上の事は思いつかなかった。

目はずっと閉じたままにしていた。

融合を少しでもうまく出来るよう、自分の姿以外、心に浮かばない様に。

だから、彼は悪魔とキメラ姿を見ることは無かった。

魔法機械がブーーンと低い音を出しながら光りだす。

魔方陣の文字も光りだし融合が始まった。

悪魔とキメラと彼の姿がぼやけ始め、次の瞬間、まるで放電しているかの様な音と光りが、彼らを包む。

音と光りが徐々に収まり、その中から人の形をした者が立っていた。

それはまるで、鎧を着ているかのようにだった。

融合に使ったキメラは、四足の獣型と巨大な力二型の魔獣で作ったもので、硬い殻を持った獣型のキメラだ。

なかなかうまくいったキメラだったが、それでも動きに邪魔になる足が生えていたり、殻がうまく身体を覆っていなかったりと、今後の課題も多かったやつだったので、まさか、ここまでうまくいくとは思わなかった。

鎧のように身体を覆っている殻は黒い、身体 of 重要な部分は完璧に覆われている。

頭もまるで仮面を着けているかのように見える。

全身で見ると、重厚そうに見えながら、スラリとして俊敏そうな雰囲気も持っている。

「やりましたね！！大成功ですよ！！！」

部下が喜び勇んで駆けて来る。

当然だ、これほどの物は近年まれに見るものだろう。

詳しい能力は、調べなければわからないが、かなり期待ができる。

このサイズのキメラとしては、最高級の出来だろう。

「しかし、こうなると傀儡の魔法をかけ直さないと。」

笑みを浮かべながら、部下に返事を返す。

「そうですね、人型の物に変えないといけませんから。すぐに用意します。」

「よし！傀儡魔法を変えたら、すぐに性能を調べるからな！！みんな、これから忙しくなるぞ！！」

このキメラなら、前の失敗を取り戻せるかもしれない。

さっきまで、沈んでいた意識を持ち上げ、周囲に指示を飛ばそうとして……………

男は意識を失った……………永遠に。

序章 5

殺しの約束

彼は約束した。

うまくいったら必ず復讐すると。

ここに居る奴らを、皆殺しにしてやると。

身体が自分の意思で、自由に動くとなると、まず周囲の状況を観察した。

部屋に居るのは全部で六人、一人が扉に向かっていて。それを見てすぐさま行動した。

扉に向かっていている男に向けて、一気に駆け出し、その直線状に居た男を弾き飛ばす。

グエと言う音で振り返った男は、顔面が陥没するほどの力で殴り沈黙させた。

残った四人も、逃がすことなく意識を奪い拘束した。

殺さなかったのは、慈悲ではない。

悪魔との話し合いで、融合が予想どおりになった後の事も、相談して決めていたのだ。

まず、制御不能なキメラが生まれたことを、知られてはならない。

ゆえに扉に向かった男を最初の目標にしたのだ。

こういった危険な研究をしている所は、不足の事態に備えて、それなりの対策をしているものだ。

行動するときは、慎重に誰にも知られない様に動く。でなければ直ぐに対策を取られてしまう。

全員の拘束を終えると、あらためて自分の状態を見た。

一応人型で自由に動く、かけられた傀儡の魔法は、まったく機能し

ていないようだ。

次に、融合した悪魔とキメラの、魂の状態を調べてみる。調べ方はすぐにわかった。魂の存在を意識すると、そこにある情報を自由に見ることが出来る。

キメラの方も、特に問題は感じられない。

心配していた、情報の融合による意識の崩壊などは、起きる気配はない。

だが、悪魔の意識は崩壊してしまったようだ。どれだけ魂を調べても、あの声は聞こえてこない。

落胆しながらも、身体と魂の調査を続ける。

機能していないのはわかったが、気分的なものもあり、どうにか傀儡の魔法を解けないかと、試行錯誤していたら、魂の力、つまりは魔力でもって、無理矢理壊すことができた。

魔法を壊すのに消費した魔力は、しばらくすれば回復するようだ。

悪魔の情報を調べていたら、ある情報に気が付いた。

それは悪魔の名前だった。

ギルベック

それがもう居ない悪魔の名前。

「ギルベックか……ギルベック、オレの名前は水野友だ。」

あの時名乗れなかった名を……今名乗った。

彼……水野友は次の行動に移る。

これから行うことには、再び危険を伴う可能性がある。だがユウは出来るとふんだ。

魂と肉体の状態を、調べて見てわかったことは、魂と肉体の関係が崩壊していることだ。

この世界の生物は、魂が主であり、肉体が従なのだが、ユウはどちらも主であり従であり、自分の好きな様にできた。

ゆえに、魂の記憶や容量を使え、自分の元の体をさつきより強くイメージ出来る様になり、また融合の際、自分の意思が反映する感覚があったので、再び行うことに、さほど危険はないと判断した。

しばらく時間が経ったために、何人か目を覚ましていたが、特に気にせず、今だ気絶していた男を魔方陣へと引きずっていく。

装置の使い方はギルベックから聞いていたし、記憶を探れば確認もできる。

装置にはタイマーも付いていたので、問題なく融合することができた。

ユウは二度目の融合でコツを掴み、より正確に自分の肉体を再現でき、身体を覆っていた、鎧のような殻は消えて、人間らしい皮膚が現れた。

こうして融合を繰り返し行い、五度目には、完全に元の姿を取り戻すことができた。

四人目と五人目は意識があったので、その顔は恐怖と絶望で歪み、猿轡を咬まされ口を塞がれながらも、許しと慈悲を懇願してきたが、もちろん構わず融合した。

これほどの苦しみ様なら、ギルベックもさぞ満足だろうとも思った。

ユウは六人目の融合を、すぐには始めず、まず新たに融合した、五人の記憶と知識を調べる。

さすがに、専門家らしくカメラの生成融合に関しては、大量の有益な知識を持っており、これにより、新たな融合の可能性に気づき、それを試してみようと準備を始める。

まず思いついたのは、簡易式の融合法で、要するにこの部屋にあるような、魔方陣や魔法装置など使わずに行う融合で、必要なのは、魔法装置に組み込まれていた、各種の魔法鉱石のみ、全部集めても片手で持てる量にしかない。

魔方阵や魔法装置の変わりには、自分の魔法のみで再現する。じつはこの方法、大昔、魔法装置がない時代のやり方なのだ。ただ魔法を使う人間が何人も必要で、魔方阵も必要だったが。

準備を終えると、最後の男の前に立って、手に魔法石を持ち呪文を唱える。

「肉よ、魂よ、我が命じるがままに混じり合え。」

ユウと男を球体状の魔方阵が覆い、内部で融合の光りが起こる。しばらくして、光と魔方阵が消えると、そこにはユウしか居なかった。

自分以外誰も居なくなった部屋で、ユウは実験の成功を確認した。この方法は、大量の魔力が必要で、悪魔と五人の人間とキメラ、これだけの存在と融合して、魔力と魂の容量が、膨大な量になっていたから行えたのだ。

次に、もう一つの新しい融合法を試す。これには新たな融合素材は必要ない。

ユウが呪文を唱えると、球体状の魔方阵が再び覆い、融合の光りが起こる。

球体の中から現れたのは、先ほどユウに融合された研究員の一人だった。

「よし！成功した！！」

こんどの融合は他者との融合ではなく、自身の再融合で、これまで融合した素材を組み替えなおして、様々な姿になる。

幻などとは違い、自分の肉体が変化するので、変身が解けると言うことはないのだ。

序章 6

隠密蹂躪

ユウは、変身した姿を使い研究所の様々な所へ行き、人、キメラ、素材の魔獣と次々と融合した。

無論、誰にも気づかれぬ様、慎重、かつ素早く行動した。

ユウの融合は、魂を得て力を増大させる事から、ある意味食っているとも言えた。

研究所の一角で生まれた、恐るべき食人のキメラは、誰にも知られずに、犠牲者を増やしていく。

もつとも、この惨劇の引き金を引いたのは、彼ら自身である。

己の欲望のために、人間の尊厳を汚し、踏み躪り続けた、行為の果ての報いと言えなくもない。

人々が、研究所で行われてきた、数々のおぞましい所業を知れば、嫌悪してこの惨劇に対して、同情よりも喝さいを送るだろう。

ここには、定期的に奴隷が送られてくるが、キメラの材料にされる者は運がいいほうで、他の者は戦闘実験としてキメラと戦わされるキメラと戦わされる者は、死の恐怖のほかに、爪と牙による肉体的苦痛も受けてから殺される。

この光景は職員達の、格好の娯楽として定着しており、今日は何人死ぬだの、どうやって殺されるかだの、賭けの対象になったりもしていた。

また、賭けに嵌ったり、戦いの光景に熱狂した者は、自ら本来必要のない戦闘実験を、わざと繰り返し行ったりしていた。

まさにここは、人間の悪徳と狂気と欲望が生み出した、負の樂園だった。

ユウは、研究所の人間と融合して食らうたびに知る、あまりに腐った行いが、自身の更なる怒りと憎悪を滾らせ、今行っている虐殺に

対する罪悪感が、ますます減っていくのを感じていた。

扉が開き、ついさっきトイレと言って出て行った男が部屋に戻ってきた。

ハゲた頭をボリボリとかきつつ、自分の机に近づく。

昨日から、この場にいる全員で書類仕事をしていたが、今だに終わる気配がない。

机に座った男が、同僚に向けた目を戻し、ふたたび仕事に戻った時、その同僚から突然「眠れ。」と声が飛び、それが魔法だと気づく間もなく眠りに落ちた。

全員を眠らせてから、順番に食らっていく。

それにしても書類仕事をしている様子など、まるで普通のサラリーマンのようだ。

だが、そんなものかも知れない。

あの狂気の宴は単なるゲーム、死んで行くのは自分と同じ人間ではなく、奴隷と言う別の生き物、ここに居る者達はそう思っているのだ。

ユウは、ここの者達を腐っていると思いながらも、哀れだとも思っただ。

彼らは、自分の価値観が狂っていることに気づいていない。

ここに来てから狂ったのか、その前からなのか、いずれにせよ気づく機会があった。

だが彼らは、気づくことを拒んだが故にここにいる。

今からでも、元に戻る者は居るかも知れない、だがそれを考慮する義務も義理もない。

彼らは、今ここに居る、ただそれだけでもって、報いを受けるのに十分な理由になるのだ。

この場が生まれて、初めて現れた復讐者にとっては。

かなり人数が多い。

『後回しにするか？』

ユウは入り込んだ食堂で考える。

この人数を無力化できれば、ここから先が一気に遣り易くなるだろう。

悪魔の力で周囲を調べると、うまいこと食堂の周りに人が居なくなっている。

『中の人間を逃がしさえしなければ、どうにかなるかな。』

扉は二つあり、ユウの近くに一つ、厨房の近くに一つある。

警報装置も二つ、一つは同じくユウの近くに、もう一つも厨房の近くで、扉との小さな間にある。

『眠りの術を連発すればいけるか？』

ユウの魔力は大きく、これまで一度も失敗していない。

だがすべて不意打ちで、正面からかけたことはないし、効果範囲もこの部屋の三分の一ぐらいしかない、そのため少し不安があった。

最初以外は、正面からかける事になるので迷うが、時間もない。誰も、入ろうとも出ようともしていない、今がチャンスなのだ。

ユウは迷いを捨て動く決断した。

「眠れ。」

人が一斉に倒れる。

範囲外の人が、何事かとこちらに顔を向けた時には、すでに走っていた。

「眠れ。」

次の範囲内の人が倒れる。

非常事態と気付いた者が、慌てて警報に近づいていた。

「壁よ。」

三つ目は障壁の魔法で、扉と警報を覆い誰も近づけなくなる。

警報に近づこうとした男が、不可視の壁に阻まれ立ち往生する。

「おっ・・・お前！？いったい何のつもりだ！？」

一人の男が、事態の説明を求めるが、ユウは答えず無視して周りを見る。

二度目の術では、何人が眠らなかつたりすぐに起きた者がいた。

「雷撃。」

攻撃魔法で起きかけた者を気絶させ、その後も次々と魔法を繰り出す。

「雷撃、雷撃、雷撃、雷撃、雷撃、雷撃」

一言で発動する魔法に、まったく対処する事が出来ずに、バタバタと人が倒れてゆく中で、

何人かが詠唱を終え、反撃をした。

「火矢！」「風矢！」「水矢！」

それぞれが、思い思いの魔法を使い攻撃するが、ユウは簡単にかわしてしまふ。

防御魔法を使い、身を守ろうとした者もいたが、一撃で防御を崩され、二撃目で倒れた。

頭を働かせた者が、ユウの後方にある、警報を狙って魔法を飛ばす。警報装置はスイッチの部分を壊わしても作動するからだ。

だが、不可視の壁に阻まれ届かない。

「なっ！なんでだ！！？」

ユウは自分の近くにあった、扉と警報は予め障壁で覆っていたのだ。不可視なので、誰も気付かなかったのだ。

行動開始から一分と経たずに食堂の中は沈黙した。

改めて、力で周囲を調べて、近付く者も、ここの様子に、気付いた者も居ない様だと判断すると、倒れている者達を、食らっていった。しばらくして全員を食らい終えると、次の獲物を求めて、この場を離れていった。

誰も居なくなつた食堂の厨房から、人影が現れる。

それは料理を持ったゴーレムだった。

ゴーレムは、料理を注文をした者が、座っていた場所のテーブルに料理を置くと、他のテーブルから空の食器を回収して、厨房へ戻っていた。

厨房の中では、食べられることの無い料理を、ゴーレムが作り続けていた。

「妙だな・・・」

巡回中の警備兵が、人気の無い通路を歩きながら呟いた。

いつもなら、これだけ歩けば、他の人間を見かけるはずなのに、まるで見当たらない。

時間は昼を過ぎたあたりで、人氣が無くなる時間ではない。

念のためと思い、夜でしか見回ったことの無い、部屋の中も見て回ったが、一人も見当たらない。

三度目まで、人が居なくても、何も思わなか思わなかったが、五度目から疑惑が大きくなり、十度目で確信に変わった。

異常事態が起きていと。

その後も大声を上げながら、部屋を次々と見て回るが、誰も見つからない。

「・・・なにが起きてるんだ？」

徐々に恐怖を感じ始めた彼は、走りながら警備室に戻って行った。

「おーいーい！！誰かいないのかーいーい！！！！」

大声を上げながら戻っていたが、誰も答えない。

結局、誰とも会うことなく戻ってきて、警備室に飛び込んだ彼の目には、更なる驚愕の光景が映った。

誰も居ないのだ。

通常この部屋には、絶えず十人以上の人間が詰めているはずで、彼が巡回に出た時には、確かに十数人の同僚が居たのに、今は誰もいない。

部屋はひどく荒れており、あちこちが焼け焦げていて、ここで戦闘があつたのは間違いない。

全員やられたのか、やられたとすれば、死体が無いのは何故か、或いは、襲撃者を撃退して、全員で追っているのかもしれない。

ここで何が遭つたのかを想像していたが、ふと気付く。

戦闘があつたのなら、必ず警報を鳴らすはずだ。

だが、警報は未だに鳴っていないし、鳴らし忘れる事などありえない。

「十人以上居て、警報を鳴らすことも出来ないなんて、いったい敵は何人いるんだ？」

敵の人数を考えながらも、彼は警報を鳴らして、この異常事態を周囲に知らせた。

序章 7

制圧完了

警報が鳴り響いていた。

「とうとうバレたか。」

これまで、不意を突ききれずに戦ってしまい、痕跡を残してしまつた場所がいくつかあったが、そろそろ見つかるとも思っていたので、慌てず予定どおりに行動した。

まず、転送装置を破壊して、兵の増援と逃げ道を潰す。

転送装置のある部屋に向かい、部屋の前まで来ると、呪文を詠唱しながら部屋に入る。

「火よ、風よ、我が命に従い、紡がれ出でよ、爆炎球！」

手の中に現れた炎を、転送装置にむかつて放つ。

炎は装置に当たると、大爆発を起こし、木っ端微塵にして、振動は建物全体を揺らした。

装置の近くには人が居て、爆発に巻き込まれたが、まだ生きていた。

「た・・・すけ・・・て・・・」

「イヤだね。」

ユウは冷酷に言い放つと、すぐさま融合して食らい、他に生きている人間が居ないことを確認して、物陰に隠れた。

研究所内は混乱の極みに達していた。

突然の警報と、それに続いた爆発。事態を完璧に把握している者など一人もおらず、むしろ大半の人間が、すでに餌食となって食われていたことを、知る者はいなかった。

転送室に警備兵や研究員が駆けつけてきた。

「なっ！なんだよこれ！！」

「おい！！誰かいらないのか！？」

「いったい、何が起こったんだ！？」

「とにかく人が居るはずだから探すんだ！ここには何時も何人か居たんだぞ！！」

「その前に火を消せ！煙が邪魔だし燃え広がったら拙いぞ！！」

室内の惨状に怯みながらも、警備兵は中に入り、火を消したり生存者を探し始めたりしたが、突然襲い掛かれた。

不意を突かれたこともあるが、一言で発動し、しかも発動と同時に着弾という、通常では考えられないスピードで襲い掛かる雷撃によって、瞬く間に全滅した。

彼の雷撃は、この世界の人間が使うものより明らかに早い。

それは彼が、光りの速度がどんなものか知っていたからだ。

むろん詳しく知っている訳ではないが、光りの速度を人間の感覚で知覚するなど不可能であり、ゆえに発動と同時に着弾という現象に、一切の疑問がなかったからだ。

魔法の発動に、イメージはかなり重要で、この世界の人間は、光速を理解も想像も出来なかった為に、雷撃本来の力を、発揮できなかったのである。

扉の外から、中を覗いていた研究員達は、突然起こった事に見入ってしまった。

物影から突然現れた男が、警備兵との間に一瞬で光る糸を出し、警備兵達が次々と倒れてゆく。

この光る糸がユウの使う雷撃なのだが、人間の目には早すぎて糸の様に見えてしまうのだ。

警備兵が全員倒されると、男は倒れた警備兵に近付いて球状の魔方陣に警備兵ごと覆われる。

魔方陣が光り消えると、その場に居たのは男だけだった。

「うわあああーーーー！！！！！！」

この光景に、恐怖した一人が、悲鳴を上げ逃げ出すと、残りの者も、後に釣られる様に次々と逃げ出したが、背後からの雷撃で、全員気絶させられて、食われることになった。

その後もここには次々と残った人が集まって来るが、少人数かつバラバラに来てしまったために、各個撃破に最適な形となり、誰も逃げられず、雪崩式に犠牲者が増えていった。

ユウは、自分の状況を、良く理解していた。

自分という存在は、この世界にとって明らかに異質かつ異常であり、到底受け入れられない存在で、知られば社会全体が自分を排除しようとするだろうと。

そして、それを避けるには、徹底的に情報を封じ込めなければならず、そのため執拗なまでに、相手を逃がさない様に行動した。

結果、施設内においても情報がまったく伝わらず、次の様な事が起こる。

「なあ、この警報とさっきの爆発音、やっぱり関係あるのかな？」

「そうだな・・・じゃあ俺が様子を見てくるよ。」

「悪いな、催促したみたいで。」

「いいって、それより面白い情報、掴んで来てやるからな。」

「気をつけるよ。」

「おう。」

「あいつ、遅いな。」

「どうしたんだ？もうずいぶん経つけど。」

「しかたない、オレも様子見に行つて来るか。」

この様な事が施設内の各所であり、少人数ずつ、来てしまう事になったのだ。

ちなみに唯一、警報を鳴らした警備兵は、この爆発が襲撃犯の仕業だと気付き、

爆発現場に向かう、他の警備兵と合流することができたが、

「おーい！おーい！おーい！止まってくれー！ー！ー！」

「何か止まれって言うてるぞ。」

「馬鹿言うな、現場はこの先で、一刻を争う事態だったらどうするんだ。」

「そうだぞ、おーい！言いたいことが在るんなら、走りながら話せー！ー！」

「たっ！たのむ！！止まって話を聞いてくれ！！！」

「だから止まれないって！話ならこのまま言えよな！」

「わっ！わかった！！じつは、この警報オレが鳴らしたんだ！！」

「はあ？どう言う事だ？お前、爆発とは違う方から来ただろ？」

「そうじゃない！！警報は爆発の為にじゃなくて、爆発のほうで警報の為に起きたんだ！！！」

「わからん・・・どう言う事なんだ？」

「だから！！この先には多分」あつ向こうから人が来るぞ、おーい！！！」

「あんた、向こうの様子知ってるかー！ー！？」

「まて！！もしかしたらあいつも」

彼が喋れたのはそこまでだった。

彼は結局、自分が知った事実を誰にも伝えられなかった。

建物の回りには塀があり、その間の庭にかなりの人数がいた。

彼らの大半は、爆発に脅えて、外へと逃げてきた者達だ。

建物の正面、玄関から唯一の門との間に、集まっていた。

「本当に、大丈夫なんだろうなここは？」

「さあ？でもさつき、かなりの人員が現場に向かいましたから、その内連絡が来ますよ。」

「さあつてなんだ！さあつて！それにこっちもさつき同じ事聞いたぞ！！」

だからもうさつきじゃなくて、ずいぶん経ってるって事なんだぞ！！」

「本当にどうしたんでしょうか。」

「オレに聞くな！だいたいこんな時の為に、お前らが居るんだろうが！！」

「そういえば、そうでしたね。」

「ああもう、こいつは・・・」

「おや？また誰か出てきましたよ？」

「本当だ！なあ、あんた！向こうで何が起こったか知らないか！？」

「眠れ。」

「へ？」「ほえ？」

彼らは、あっさりと意識を失い食われたのだった。

ユウは眠らなかった者や、眠りの魔法の効果範囲外に居た者を、もつと、射程の長い雷撃で、次々と倒してゆく。

また、この雷撃にやられたのは、見えない位置に居たはずの、門の向こうに居た門番達、この光景を、建物の窓から見ていた者達もふくまれた。

悪魔の力、正確には悪魔の視覚を使いながら、行動が出来るようになっていたのだ。

人間の目には映らなくても、悪魔の視界からは、ばっちり見えており、あとは雷撃を曲げ、射程を伸ばせば良く、両方とも左程難しくなかった。

軌道の変化は最初からでき、射程は普通、使う魔力を増やしたり威

力を落とすかだったのだが、これは、目標到達まで発動させ続ける、時間に関する問題だったので、光速で発動する彼の雷撃は、とくに使用魔力を増やす必要も無かった。

これにより、四方上下すべての面を塞いでない限り、ユウの誘導型の雷撃を、防ぐ方法は無い。

一人も逃がせない制圧は、この後すぐに終わった。

序章 8

巨大倉庫で

研究所を完全に制圧した後、一番深くにある、巨大な倉庫に足を運んだ。

一番深くに有りながら、一番広いここには、大型の魔獣を使ったキメラが、それこそ何十頭と安置されていた。

ここの扉は、研究所の所長にしか、開けることは出来ないはずだったが、ユウはいとも簡単に開けることが出来た。

扉の鍵には、本人確認のために、魔力の形質を測定するという方法をとっていた。

魔力の形質とは、人間ひとりひとり違うもので、先天的にも違い後天的にも違ってくるので、同じものは一切ないとされる。

なお、これをカギにした場合、だいたい一ヶ月に一度の頻度で、登録し直さないといけず、だいたい三ヶ月ほどで認識でなくなる。

ユウは、融合を繰り返すうちに、魂の力の使い方にますます磨きがかかり、融合した相手の魔力形質をも、再現できるようになっていたのだ。

ここにあるキメラは、古いものになれば百年、二百年、三百年前と古いものもあり、また、実際に戦場で運用されたものもある。性能も、古くなればなるほど良くなっていく。

これは昔の方がキメラの製造研究が盛んであり、現在に至るまでに、技術が退化してしまった明かしであった。

大型の魔獣のほとんどは、老いて衰えるということがなく、すなわち寿命がない。

ゆえに、ここに居るキメラ達も、老いることも衰えることもなく、すべて眠っている状態なのだ。

ユウは、この巨大な恐竜の群の様な、キメラ達に一切臆することなく、次々と融合していった。

全てのキメラとの融合を終えると、倉庫の一番奥にある彫像向かった。

色は霞んだ黒で僅かに光沢が有り、硬そうだが軟らかそう、冷たそうだが暖かくもありそうな、不思議な色艶をしている。

形は人型だが、何とも奇妙で、その姿からはある意味で場違いな感じを受けた。

『なんと言うか、まるでヒーロー物の、着ぐるみ見たいだな。』

それも主役のライバルとして、何回も出て来る様な感じの・・・そう言えば、オレも最初の融合では、似た様な系統の姿になったな。なにか意味があるのか？』

なんだか、気分と思考がビミョーな方向へ、行きそうになったが、あわてて引き締めた。

一見、子供向けテレビ番組に出て来る、敵役見たいな姿をしているも、これの正体は、そんなのんびりした物じゃない。

これは上位悪魔なのだから。

ユウは、彫像の様になっている悪魔の前に立ち、様子を見る。

どうやら、かなり強力な力で封印されているらしく、ギルベックの様に念話で話したり、周囲を見たりすることは出来ないようだが、意識まで封印されているかは、見た目では分からない。

そこで、直接触れて、念話で声を送った。

『えーと、もしもし？聞こえますか？』

まるで電話の様に話しかける。

『ナンダ？誰ダ貴様ハ？ソレニモシモシトハ、ドウ言ウ意味ダ？』

返ってきた声に、自分のことと、日本特有の、電話での呼びかけ言葉について、質問される。

『あ、つい癖で、それはともかくあんた悪魔なんだよな？』

ユウは、相手の質問を無視して、悪魔であることを確認する。

融合した人間の記憶から悪魔なのは分かっていたが、見た目が見た目なので、どうにも微妙に信じきれなかったのである。

『当たり前だ、何だ貴様ハ、ワシヲ封ジタ魔術師デハナイノカ?』

悪魔は、自分に声を掛けてきた者の正体を、一瞬誤解した。

ちなみに、悪魔を封印した者は、五百年以上前の人間で、とうの昔に死んでいる。

封印によって、意識以外のすべてを遮断されていたので、どれだけ時間が経っていたか、さっぱり分からなくなっていたのだ。

『・・・イヤ、違ウナ。感ジル魔力ニ覚エガ無イ、

トイウカナダ?人間ト悪魔、両方ノ気配ヲ感ジルゾ、ドウナッテオルノダ?

マサカ、キメラトハ思エヌシ。』

悪魔は、念話から感じる不可解な魔力に、疑問を感じる。

『おお!正解だ、よく分かったな。』

ユウは、あっさりと、正体を見破られ驚く。

『ナント、本当ニキメラナノカ?イッタイドウ言ウ事ダ?』

キメラは、意識を保つことが出来ない、という常識を、覆したという存在に驚いた。

『まあ、話せば長くなるんだが。』

『カマワン、ズイブント退屈シテオッタ所ダ。遠慮ナク話スガ良イ。』

五百年以上もの間、他者と会話をすることの無かった悪魔は、喜んで話の先を促した。

ユウ、はここでの出来事を話していく。

異世界から召喚されたこと、キメラにされたこと、研究所を全滅させたことを。

『クッククク・・・ナカナカ、不幸デ面白イ目ニ遭ッテオ
ル様ダナ。』

『不幸はともか、く面白いつてなんだよ!』

悪魔の感想に、ユウは声を荒げる。

『ワシハ聞イテテ、面白カッタゾ。』

『根性悪い奴だな。』

『悪魔ダカラナ。』

『自分で言うな。』

『ワーーハッハッハッハッ！！』

五百年振りの会話なので、どうにも心が躍ってしまい、ほんの小さな掛け合いで起こった笑いを、堪える事が出来なかった。

『イヤー、久シ振りニ笑ッテスツキリシタワイ。オカゲデイイ気分ノママ死ネルノウ。』

『！！・・・気付いてたのか、アンタを食うつもりだったって。』

ユウの心を、見透かした様な、悪魔の言葉に驚く。

悪魔をこのままにしてをけば、いずれ研究所の仲間の魔術師に、キメラの素材にされるのは、分かりきったことで、だからといって、持つて行くには邪魔になるし、隠しても見つかったら、面倒なことになるし、封印を解くのはもつと駄目だろう。

ユウは結局、融合するのが一番だと思っていた。

そして悪魔は、ユウの心を読んだ上で融合されてもいいと思っていた。

どうせ人間に利用されるのなら、こいつの方が良い、惜しむらくは結末を見届けられない事だが。

『当たり前ダ、ソノクライ気付カンデカ。シカシオ前ナンダッテ、サッサトワシヲ食ワンカッタノダ？』

『ただの興味本位だよ。最初に融合した悪魔以外は、キメラにされたのしか見なかったからな。』

しかしよく考えたら、ここの世界に来てから、悪魔としかまともに話をしてないぞ。』

同じ？人間からは、会話どころか人間扱いすらされず、本来人間にとって邪悪な存在である、悪魔と会話し、しかも助けられてすらいる。なんとも奇妙な状況だ。

『ワシモコノ世界ノ住人トハ言エシガ、ソウナルト未ダ二人間トノマトモナ会話ハナシカ。』

『……………マトモジヤナイノナラアツタノカ？』
『……………すこしだけ。』

研究所を制圧する際、相手を騙して近寄ったり誘き寄せたりするのに、話をしたが、とてもまともな状況とは言えない。

『クツクツクツ、ヤハリ才前ハ不幸デ面白イナ。ヨシ、餞別二才前ノ未来ヲ占ツテヤロウ。』

ム！ムムム！？見エタゾ！！喜べ、才前ハ一生不幸デ面白イ人生ヲ歩ムダロウ。』

『ふざけんな！そりゃ餞別じゃなくて、呪いじゃねーか！！そんな人生送って堪るか！！』

実際、悪魔に未来が見えたわけではないのだが、言っているのが悪魔なので、本当に不幸で面白い人生を、送ってしまうかもしれないと感じて、ユウは怒った。

『マア、ソウ言ウナ、少ナクトモ、何モナイ暗闇シカナイ日々ヨリハ、ズットイト思ウゾ。』

『……………』

悪魔が封印されていた、長い時間を思っ、口を嚙んだ。

『サテ、ソロソロ、ススキリサツパリヤツテモラオウカ。』

『まるで、髪を切る様な気軽さだな。』

あまりに自分の命を軽く言う悪魔に、ユウは拍子抜けする。

『人間ノヨウニ、髪ヲ切ツタ事ハナイガ、多分似タ様ナ感覚ナノダロウナ。』

『絶対違うと思う。』

的外れなことを言う悪魔と、それを否定するユウ。

『イチイチ上げ足ヲ取ルナ。コノママ、ダラダラト続ケテ、見苦シ

イ奴ダト思ワレタラドウスル。』

『誰にだよ。』

全く誰に言っているのだろうか？

『取ルナトユーノニ、マツタク。客モオランノニボケ続ケルノニハ
限界ガアルゾ。』

『やっぱりわざとボケてたか、っていうか客が居ればもつと続くの
か？』

とうとうボケていたことを白状する悪魔と、よせばいいのにツッコ
ミを入れるユウ。

『当たり前ダ、芸人ハ客ノ前デコソ真価ヲ発揮スルモノダカラナ。』

『じゃあこれ以上、つまらんボケを聞かなくて済むんだな。まった
く客がいなくて良かったよ。』

訳の分からない芸人理論を言う悪魔、的外れなことに安堵するユウ。
問題は其処じゃないだろうに。

『ダガ芸人ノ真価ハ、ネタガ尽キタ時コソ試サレルト言ウ、故ニコ
レカラガ本当ノ戦イナノダ!!』

『何と戦うんだ何と!! っていうかお前芸人じゃなくて悪魔だろ！
!?!』

ますます訳の分からない事を言い出す悪魔と、キレの出て来たツツ
コミを入れるユウ。

『何ダト! 貴様悪魔ガ芸人ニナツテハイケナイト言ウノカ!?!』

『だからお前は人間じゃないだろうが。』

どうでもいいが、やけに開明的な職業選択倫理を言う悪魔と、まっ
たくもってどうでもいい問題を指摘するユウ。

『クツ! 確力ニソウデアッタ.....芸悪魔ト言ウベキダツタ
ナ。』

『だーかーらー!!.....はあ、もういい.....いい
加減引導を渡してやる。』

ユウの言葉に、悪魔は的外れな、もしくは狙って、呼び方だけを修
正して、悪魔が漫才をするという根本的な問題というか、疑問を無

視した。

一方ユウはこの掛け合いに、とうとう耐え切れなくなった。

『ム、モウ終ワリカ。タシカニ、コレ以上八読者モ厭キテクルダロウカラナ。』

『ついに言いやがった……いいな、これで終わりだぞ。』

物語のキヤラとして、言ってはいけない事を言う悪魔と、登場人物が暴走するという事を実感した作者。

そして、この掛け合いに終止符を打つと宣言するユウ。

『ウム、最後ニトテモ楽シイ時間ガ過ゴセタ、有難ウ。』

『まあ、こつちも結構楽しかったよ。』

ようやくまともに言葉を返してきた様で、ユウは安堵した。

『心残りハ、自己紹介ヲシテイナカツタ事ガ、残念ト言エバ残念ダガ。』

やはり最後までチャチャを入れるつもりだとすぐに分かったが。

『………水野友だ。』

『オオ、コレハゴ丁寧ニ、私ハ、ヤルザンプト言ウ。』

シカシ、別レノ際ニ自己紹介トハ、ナカナカ乙ナ経験ダツタナ。』

死の別れなのに、最後まで軽くするつもりらしい。

『じゃあ、本当にこれでサヨナラだ、ヤルザンプ。』

『サラバダ、ミズノ・ユウ』

ユウが融合の魔法を使い、魔方陣が展開して、融合が起こる寸前に、
『………オオ！ソウ言エ』

悪魔ヤルザンプは何かを、言おうとしたが、ユウは聞けなかった。

『………あの野郎、狙ってやがったな。』

ヤルザンプの最後の記憶を調べて見てみると、やはり最後の喋りかけはワザとだった。

最後の最後まで、ふざけて締まらなかった悪魔ヤルザンプ。

ここまで来ると、むしろアツパレだと思った。

『しかし………変な奴だったな。』

ある意味疲れたが、ヤルザンプとの掛け合いは、それでも楽しく感

じていたので、居なくなると、奇妙な寂しさが込上げてきていた。

序章 9

大量の獲物

ユウは、研究所の物を次々と収集していた。

ヤルザンブは、変な奴だったが、確かに上位悪魔と言われるほどの力を持っていた。

その内の一つが大規模な空間の制御で、場所の移動は基より、自分専用の亜空間を作れ、そこに大量の物を入れられる。

「まるで何々ポケットだな。」

大量に持ち運べるのを、これ幸いと、とくに判別したりせず、手当たりしだいに亜空間に入れて、持つて行く事にした。

作業がすべて終わるころになると、外は薄暗くなっていた。

実はここにはまだ人が残っている。実験用に連れてこられた奴隷達だ。

彼らは、命令に服従するよう、魔法の呪いや枷を掛けられて牢屋に入れられていた。

ユウは彼らを解放するつもりだが、自分の事は知られたくないので、姿を見せずに眠らせてから、牢屋の鍵をあげ、枷や魔法を解き、彼らの分の当面の食料と金を残してから研究所を去った。

奴隷達は困惑していた。

警報が鳴り響き、大きな振動が襲うが、ここでは何が起きているのか分かるはずもなく、ましてや、ここに説明出来る者など居ない。何人かは、脱出のチャンスかもしれないと、騒ぎ始めたが、殆どの者が無理だと諦めて、ただ鳴り響き続ける、警報の音を、聞いている事しかできない状況だった。

暫らくして、警報の音が止んだ。

「さっきの音はいつたい何だったんだ？」

「さあな。何にしる俺達には、関係無い事だろうよ。」

「あいつら、説明しに来ないかな。」

「どうせ殺す奴隷なんかの所に、来るわけ無いだろ。」

「そうだよな。」

警報が止まったことで、脱出と騒いでいた者も、無理だと諦めていたが、淡い期待も抱いていた者も、一様に落胆していた時、突然強烈な眠気に襲われて、全員抗うことなど出来ずに、意識を失った。

「おい！起きろよ！！」

「う・・・うん・・・なんだよ、いつたい。」

「いいから起きて目を覚ませ！！そして手足を見てみる！！」

男は、奴隷仲間に言われるまま、自分の手を見て気付く。

「なっ！！？無い！！？」

あわてて足を見る。

「こつちも！！いつたいどうして！！？」

手足に掛けられていた枷が、無くなっていった事に驚き、周りを見ると全員が、同じ状況だったのを見て、さらに驚く。

「枷だけじゃない、扉の鍵も開いてるんだ。」

扉に目を向けると、扉は外側に開いていた。

「いったい、何がどうなってるんだ？」

意識を取り戻したら、枷が無くなり、おまけに扉が開いていたという、

あまりに出来すぎた状況に、奴隷達は最初に罠を疑い、外に出るのを躊躇していたが、ここに居ても殺されるだけという恐怖と、助かるかもしれないという希望によって、外に出ることを選んだ。

恐る恐る牢屋の外にでた奴隷達は、そこに大量の食料と、いくばくかの金が置いてあったのを見つけて、首を傾げた。

その後も、慎重に研究所の探索を続けるが、誰とも出会わず、とい

うか何も見つからない。

大型家具さえ見つからず、まるで引越し跡のような部屋ばかりだった。

奴隷達は、すでに夜だったので、一晚をここで過ごし、明日の朝早くここを出ることにした。

この人間が、一時的に何処かへ移動しただけなら、直にでも戻ってくるかも知れず、また捕まったら、今度こそ殺されるかもしれない、急いでここを離れることにしたのだ。

なぜ枷が無くなったのか、なぜ扉が開いていたのか、なぜ誰もいないのか、なぜすべての部屋からあらゆる物が無くなっていたのか、なぜ食料と金が牢の外にあったのか、何一つ分からぬままに、早朝、明るくなると彼らは急いでこの場を後にした。

この世界の人間が使う、瞬間移動の魔法は、あらかじめ入り口と出口に、魔法装置を設置しておかないと使えず、魔法使い単独での転送は未だに出来ていない。

だがユウは、悪魔の空間制御の力によって、単独での瞬間移動が出来るようになっており、この瞬間移動は悪魔の力なので、人間の魔法のように空間結晶を使わず、また、入り口と出口に、何も設置する必要が無く、何処にでも自由に行ける様になったので、研究所から遠く離れた、場所に来ていた。

ユウが来たのは、大型の魔獣が多数いる場所で、人間は住むどころか、通ることもできない場所で、ここで彼は手に入れた物をゆつくりと確認していた。

亜空間の中にある物の数は膨大で、すべて調べるのは骨が折れそうだった。

キメラに関する資料、道具、装置などなど、これがやはり一番多く

あり、他には、警備兵の武器や防具などの装備、職員の私室にあった私物などである。

中には金庫もあり研究の為の資金などが入っていた。

また、食料や日用品、変わったところで厨房に居たゴーレムも、持ってきていた。

手に入れた現金だけでも、一生食うのに困らないだろう。

彼は、亜空間から、見慣れないものを取り出しては、魂の記憶を見て調べていつていた。

その後ユウは、ここで、自分の身体や魂を、徹底的に調べ研究した。それは、時間を掛けて焦らずにじっくりと行い、結果的にこの場所で、半年以上もの長い時間、過ごすことになった。

第1章 1

魔獣狩り

深い森の中を、全身に鎧を着込んだ男が一人で走っていた。

鎧は独特な形をしており、一目見て複数の材料から作られたことが分かり、ある所は金属で、ある所は鱗で、またある所は骨でと、実に様々な素材から出来ている様だ。

また、作りも非常に精巧で、腕のいい職人の手による物とわかる。

男の後を追うように、大きな地響きが近づいてきており、木々が圧し折れ倒れる音も、聞こえて、いよいよもって、走るスピードを上げ必死の形相で駆け続けるが、それは聞こえてきた。

「グウロオオオオオオー！！！！！！！！！！」

その凄まじい咆哮は、それだけで気の弱い人間を、死に至らしめる様な圧力を持っていた。

咆哮の主は、全身を硬質なうろこで覆われており、鋭い爪と牙を持ち、頭からは明らかに攻撃用と分かる角を持ち、背中と長い尻尾の先には頭と同じ角がまるで棘の様に生えていた。

全高は3メートルほど、全長にいたっては10メートルを超えるほどの巨大さだ。

この恐るべき生物は、愚かにも自分に挑み情けなく逃げている、小さくひ弱な存在を、惨めに噛み砕くべく、大きく口を開けそのアギトの餌食にすべく、狩の詰を行おうと飛び掛った。

「うおおおおおー！！！！！！！！！！？・・・・・・あつあぶなかった！！！！」

ジャンプして一気に距離を詰めてくる、怪物の気配を感じ、とっさに横っ飛びをして難を逃れたが、以前危機は続いている。

すぐさま立ち上がり、駆け出すが、怪物もしつこく追いかけてくる。男は絶体絶命のピンチなのに、何故か必死の感じは分かるが、悲壮な感じはしない。

周囲を見て、時折笑みさえ浮かべて、駆け続ける。

再び、魔獣が飛び掛れる距離に男を捉え、四肢に力を込めた瞬間、真横から強烈な一撃をくらい、吹っ飛ばされた。

怪物が喰らったのは、振り子のように設置された、丸太の罠で、しかも先端が尖っていたので、脇腹にかなり深く突き刺さるが、反動ですぐに抜けた。

「よっしゃああー！！！！やったぞおおー！！！！」

罠の設置されていた木の上から、別の男が喜びながら降りて来て大声を上げる。

「見たかよ！！このドンピシャのタイミング！！おれってすげー！！！！」

走っていた男と同じように、鎧を着込んでいたその男は、踊りだしそんな様子で喜んでいたが、

「喜ぶのは後にしろセイルス。」

ヤブの中からこれも同じく鎧を着た男が、油断無く大きな斧を持って現れ、続いてまた別の男が現れ、全力疾走をして、喋る事も出来そうに無い男に、駆け寄り話しかける。

「大丈夫ですか？シャリオさん、すぐに回復させますから。」

「ゼイ！！！！ハア！！！！ゼイ！！！！ハア！！！！」

座り込みはしなかったものの、手を膝に付いて頭だけ動かし返事をする。

「我が主ラムサスよ、貴方の僕に、今一度大いなる奇跡を・・・」
駆け寄った男の手から、祈りの言葉とともに淡い光りが注がれ、シ

ヤリオと呼ばれた男の体力が回復した。

「ふう、あんがとなリックス。」

「はい、どうぞ致しまして。．．．あと、これを。」

「おう。」

シャリオは、預けて置いた剣を渡される。

彼は、セイルスが発動させた罠まで、あの怪物、グランバラムと言う大型の魔獣を、おびき寄せる役目を負い、ここまで逃げてきたのであった。

なお、彼の剣は走るのに邪魔だから預けていたのだが、鎧は万が一を考えると預ける気にならなかったのだが、そのせいで追いつかれそうになり、何度も死に掛けていた。

「三人とも、まだ気を抜くなよ。」

斧を持った男、名をバレンと言うが、彼は罠に弾き飛ばされ、倒れたままのグランバラムを見据えたまま、注意を促す。

「でもよー、さっきの見たる？脇腹にブツサリだぜ？さすがに生きてねーんじゃねえの？」

セイルスが樂觀した様子で答えるが、それをあつさり否定するように魔獣が起き上がる。

「ウエエエ！？うつそ！！マジー！！？」

脇腹の傷は、あの巨体でも十分致命傷に見えるが、グランバラムはしっかりと立ち上がり、彼等の方を見て咆えた。

「グオオオオオー……！！！！！」

「オイオイ、奴さんあんな身体でやる気マンマンだよ!!」

セイルスは気圧され、後ずさりしながら、何時でも逃げ出せる様にした。

仕掛けた罫は、これだけではなく、ほかにもあり、失敗したら順次、次の罫へとまた一人がおびき寄せて、他の者が現場へ先回りして仕掛けを動かす。

さつきはシャリオが囹になったが、いくらリックスの魔法でも体力をすべて回復することは出来ず、結果、他の者が囹にならなければならない。

そして今度はセイルスが囹をする番なのだ。

先ほど異常に喜んだのも、囹をしなくて済むと思ったからでもある。実際彼の顔は、今にも泣きそうな程、悲観に暮れた顔をしていた。

「ちくしょ〜おれの人生もこれまでか〜」

囹になることに、泣き言を言い出すセイルスだが、バレンの考えは少し違った。

「さてセイルス・・・よく見る奴を、咆えてはいるが向かってこない。あれは威嚇だ。」

「そりゃ、襲う前に威嚇ぐらいするだろう？」

「いや・・・襲う前の威嚇じゃない・・・じゃあ・・・何の為の？」

バレンは、グランバラムから目を離さず、自問し思考する。

「・・・そうか！まずい、奴は逃げるつもりだ！・・・」

バレンは、威嚇が、自分たちを、近付けさせないための物で、体が動く様になるのを、待っているのだと気付いた。

「ええっ！？マジか！？」

「そっ！それは困ります！！」

セイルスとリックスが声を上げる。

なぜなら、彼らの目的は狩であって、追い返すなどと言う事ではない上に、今回の狩は依頼人など居らず、報酬は魔獣の死骸のみで、

また、絶対に狩を失敗できない理由もあつたからだ。

「奴を逃がすわけにはいかん！直接仕留めるぞ！！」

バレンが斧を構えて走り出す。

「止むを得んか。」

シャリオも剣を鞘から抜きバレンに続く。

「ちくしょ〜結局最後は肉弾戦かよ〜」

セイルスはリックスから槍を受け取りながら半泣きになった。

「仕方ありませんよ、もう一息頑張りましょう。」

リックスは弓を取り出し構える。

「いいか、お前の回復は切り札なんだからな。前に出て来るなよ。」
リックスに釘を刺し、セイルスも二人の後を追う。

「はい！……さて僕も頑張らないと。」

矢をつがえ、弓を引き絞り、狙いを定める。相手は巨大だが体の殆どが、硬い鱗に覆われて、弓矢では、傷つけることも出来そうにないため、狙うなら傷のある脇腹か、目のある顔だろう。

味方も、この二つを狙うだろうから、気を付けないと邪魔になってしまう。

狙いを定めながら、戦い方をおさらいして、矢を放った。

「うおおおおおー！！！」

バレンは、雄叫びを上げ、自分を鼓舞しながら突っ込む。そうしないと、今にも逃げ出したくなるからで、そうせざる得ないほど、相手の威圧感は凄まじいのだ。

斧を振り上げ、叩き付けようとした時、横から大きな影が襲ってくる。

尻尾だ。

反射的にしゃがんでかわしたが、もう少し下に振るわれれば、尻尾に付いた棘に、串刺しにされていただろう。湧き上がってくる恐怖を押さえつけて、斧を振るう。

ガッ！ギイイイー！！

まるで、金属同士が接触した様な音がするが、間違いなくこれは、生物の皮膚なのだ。

十分力の乗った一撃だったが、鱗を一部傷つけただけで、下の肉には届いていない。

ならば、傷口をと、回り込もうとしたが、前足を振るわれ阻まれる。仕方なしと、振るって来た前足に、攻撃するが、先程の様に弾かれる。

再び尻尾と前足が襲い掛かるが、今度は後退してかわす。

バレンに気を取られて、横から来たシャリオに気付くのが遅れ、傷口に接近されるが尻尾で薙ぎ払おうとした時、顔面に矢が飛んで、反射的に目を瞑ってしまい、対応が遅れる。

結果、シャリオの剣は、傷口に見事に当たり、しかも剣から炎が上がり、傷口を焼いていく。

彼の剣は、魔力を帯びた特殊な材料から造られた、魔力装備で、炎を出す事ができるのだ。

「グウギヤアアアアアーーーー！！！！」

グランバラムが明らかな苦痛の声を上げ、全身を激しく暴れさせる。あわてて剣を抜き、距離を取るシャリオ。あの巨体で全身を使って暴れられたら、自分達ではどうにもできず、離れるしかないが、重傷を負っている今、ああも激しく動けば、著しく体力を失うだろう。

一頻り暴れて、グツタリした所で、再び攻撃を仕掛ける。

バレンが、正面に立ち注意を惹きつけようとするが、無視して、傷口の方に近づこうとするシャリオに尻尾を振るい、近付けさせない。反対側から、セイルスが来ていても、此方も無視していたが、彼が槍を当てた瞬間、全身に衝撃と痛みが走り、それが傷口を刺激して、強烈な痛みとなり、動きが鈍る。

そこを再び、シャリオが狙うが、身体を捻られ、傷口には当たらなかった。

セイルスの槍も魔力装備で、彼の槍は帯電して、触れた相手に、電撃を与えることが出来る。

シャリオの攻撃を捻って逸らした瞬間、顔面にバレンの強烈な一撃が入った。

バレンは自分に対して、まったく対応しなくなったので、十二分に力の乗った一撃を、狙い済まして入れることができ、それ程深くはないが傷を与え、また脳に衝撃を与えたお陰で、一瞬動きを止めさせ、再びシャリオの一撃が入ることになった。

グランバラムは、結局傷口のみを守ることが出来ず、三人に満遍なく対するしか無くなり、結果さらに、傷口を抉られ、バレンやセイルスからも細かい傷を、いくつも受け、満身創痍になっていた。

このまま行けば、遠からず倒せると思い始めた時、グランバラムが倒れたので、全員が終わったと思った瞬間、後ろ足だけで一気に前へ飛び掛って来た。

正面に居たバレンは、迫り来るアギトはかわせたが、巨体すべてをかわす事はできず、弾き飛ばされ、地面に勢いよく転がる。

グランバラムはその勢いのまま、後方のリックスに迫り、不意を突かれた彼は一步も動けず、矢をつがえ弓を構えたまま、固まってしまい、そのまま踏み潰されようとしていた。

シャリオは追いかけようとして、自分自身間に合わない事は、分かっていたが、そうせずにはいられず、セイルスは「逃げる！」と大声を上げていたが、視界に何かが入って来た時、グランバラムの巨体が逸れて、リックスのすぐ脇を通過した。

やはり限界だったのだろう、グランバラムは木々を薙倒しながら直に止まり、そのまま動かなくなり、リックスは暫らく呆然としていたが、慌ててバレンの元へ行き、治療を施した。

シャリオとセイルスは、その場へたり込んで、動かなくなった。
グランバラムを見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7889o/>

魔人種

2010年12月14日22時27分発行